

『それから』における近代教養人の苦悩の特徴
—代助の苦悩を中心に—

アミーラ・サイード・アリッィ・ユースフ（博士）
エジプト、アル＝アズハル大学言語翻訳学部
日本語・日本文学科

ملاح معاناة المتعلم المعاصر في رواية "سُورِيه كَارًا" - بالتركيز على
معاناة "دايُسوكيه" -

أميرة سعيد عليّ يوسف

قسم اللغة اليابانية وآدابها، كلية اللغات والترجمة، جامعة الأزهر، مصر.

البريد الإلكتروني: moslemamasriyaamira@gmail.com

المستخلص:

رواية "سُورِيه كَارًا" - والتي يمكن ترجمة عنوانها إلى "ما بعد ذلك"، هي واحدة من أشهر الأعمال الأدبية التي كتبها الأديب الياباني الشهير "نَاشُومِيه سُوْسُكِي" في عام ١٩٠٩. وقد تعرض الباحث في هذا البحث إلى هذه الرواية من خلال معاناة البطل "دايُسوكيه"، وذلك باعتباره الشخصية المتعلمة المحورية في هذا العمل الأدبي، حيث اتضح جلياً من خلال الدراسة أن "دايُسوكيه" تأثر بالحدث التي ظهرت في العصر الذي عاش فيه، ونتيجة لذلك فقد عمد إلى أن تكون لديه شخصية وطريقة تفكير مختلفين عن أسرته وعائلته، كأخيه ووالده وأجداده، الأمر الذي سبب له معاناة في شتى نواح حياته. ومن خلال الدراسة أيضاً، تبين أن معاناة "دايُسوكيه" تجاوزت نطاق نفسه وعائلته، وامتدت لتشمل الأمور والقضايا المتعلقة بنطاق وطنه اليابان، بل والشعب الياباني كذلك، كالأمر المتعلقة بالكساد الاقتصادي والبنية المتدهورة للمباني ومشاكل التعليم وتآزم العلاقات الإنسانية بين الأفراد، بل وبينه وبين "هيرا أوكا" أقرب صديق له. وعلاوة على ذلك، فقد أوضحت الدراسة شعور "دايُسوكيه" بمزيد من المعاناة بشأن المال والعمل والزواج وغير ذلك من الأمور المستقبلية التي لا شك في أنها ترتبط ارتباطاً وثيقاً بالاستقرار النفسي والعائلي والمجتمعي الذين افتقدهم البطل. وانتهى البحث إلى أن الرواية سلطت الضوء على معاناة مثقفين

آخرين - بخلاف البطل - كأصدقائه ومعارفه المتعلمين الذين تأثروا بتيار
الحدث الذي ظهر في المجتمع الياباني آنذاك، ورغم اختلاف المشاكل التي
واجهت كلاً منهم، إلا أن المعاناة كانت قاسماً مشتركاً بين المتعلمين
المعاصرين في ذلك الوقت. وفي النهاية أشار الباحث إلى رؤيته الخاصة
باسم الإشارة "ذلك" الموجود في عنوان الرواية - باعتباره قد يشير إلى حياة
البطل بعد "ذلك" التغيير الذي طرأ على شخصيته وطريقة تفكيره.
الكلمات المفتاحية: الحدث، المعاناة، المستقبل، ما بعد ذلك، دايُسوكيه،
المتعلم، اليابان.

Characteristics of the Suffering of Modern Educated Person in "And Then" - Focusing on Daisuke's Suffering

Amira Said Aly Yusuf

Department of Japanese and Japanese Literatures, Faculty of Languages and Translation, Al-Azhar University, Cairo, Egypt

E-mail: moslemamasriyaamira@gmail.com

Abstract:

"Sorekara" / "And Then" - is a novel written by the famous Japanese writer "Natsume Soseki" in 1909. In this research, the researcher exposed this novel through the suffering of the hero "Daisuke". This study showed that Daisuke was influenced by the modernization, as a result of that, he intended to have a different personality & way of thinking with his family, such as his brother & father, which was the reason stood behind his suffering in many aspects of life. Moreover, it was found that Daisuke's suffering exceeded the scope of himself & his family, and extended to include issues related to the scope of Japan & Japanese people, such as the economic recession, the deteriorating structure of buildings, the education problems and the complexity of relations between individuals, even between him and his intimate friend "Hiraoka". In addition, this study showed how Daisuke felt more intense suffering about money, work, marriage, that are undoubtedly closely related to the psychological, family, and societal stability that Daisuke suffered from. The research concluded that the novel also shed light on the suffering of other educated persons -as well- such as Daisuke's educated friends & the persons surrounded him, knowing that despite the different problems that each of them faced, the suffering was a common feeling

among the modern educated persons of that time. As per for the researcher's view, "Then" in the title of the novel may refer to how the educated hero's life may change "Then".

Keywords: Modernization, Suffering, Future, And Then, Daisuke, Educated Person, Japan.

『それから』における近代教養人の苦悩の特徴 —代助の苦悩を中心に—

アミーラ・サイド・アリッィ・ユースフ

エジプト・アラブ共和国、カイロ市、アル＝アズハ
ル大学言語翻訳学部日本語・日本文学科

Eメール：moselammasriyaamira@gmail.com

概要

『それから』は 1909 年に夏目漱石が書いた小説であり、本研究では、同作品の代助主人公の悩みを中心に、それにおける教養人の苦悩について考察した。代助は、近代化を受容して、その影響で父や兄等、家族の考え方と違うような考え方や性格を持つと決め、その相違で様々な面でも苦悩を感じてしまうことが判明になった。なお、自分の家族だけではなく、友人の平岡との意見対立で主人公はますます悩んだ、ということも明かした。又、そのような苦悩は、自分自身と自分の家族や友人の範囲を超え、経済や、建物、教育、人間関係といった、日本や日本人の範囲関連事項にまで及んでしまったことも明らかにした。更に、この考察により、将来の安定性と密接に関わる、お金・仕事・結婚等に対しても、代助がより深刻な苦悩的な気持ちを持ってしまうのが当然だということが窺えた。その他にも、平岡は勿論、寺尾等の主人公の知人や友人、それぞれが悩んだ問題の分析にも接せば、『それから』では、代助の苦悩のみならず他人の苦悩の描写を通じて、近代教養

人の苦悩が描かれたということで、本研究を纏めた。結論に付け加え、作品名の「それ」は、主人公が自分の性格や考え方を変えた後の、自分の人生そのもののことを考えさせる指示語なのではないか、という筆者自身の解釈に焦点を当てた。

キーワード 近代化、苦悩、将来、それから、代助、教養人、日本

1・はじめに

夏目漱石（1867年2月9日～1916年12月9日）は評論家・英文学者・俳人として人気を博した日本人小説家であり、文学作家としての夏目漱石の生涯をはじめ彼の文学作品や小説等について行われた研究が山々である。ただ、夏目漱石といえば、多くの人が真っ先に思い浮かべるのは『それから』の小説であろう。『それから』は、1909年に夏目漱石が書いた小説であり、有名な代表傑作だとされる。小説の主人公の名前は長井代助で、次男として生まれた代助は、実業家である父の陰で、職に就かずに自由気ままに裕福な生活を送る。

『それから』はすでにあまりにも論じつくされて、いまさら付け加えるものはなにもないであろう。『それから』だけを論じた単行本も数多くあるし、それに触れた書籍や雑誌等は枚挙にいとまがないほどであるので、一読すれば、『それから』の包含するすべてのテーマについて明確な概念を得ることができる。ここでは、『それから』の主人公の悩みを中心に、夏目漱石の『それから』における教養人の苦悩の特徴という問題意識をその周辺に限定して考察するに止めたい。以下において、森本政彦発行の「それから」（『森本政彦発行漱石全集 第六巻』岩波書店、一九九四年五月九日）（以下、『それから』）に拠って、漱石の作品引用をする。

2・問題定義

深江浩「『それから』論」同志社大学国文学会、1972年、42・60頁）は、

漱石は「現代日本の開化」の中にはまらまれる社会的・精神的な問題性を具象化したと言える。

（省略）漱石はここで新時代の知識階級の精神的な問題性を静観的な自慢の成立とその自壊においてみているかのようである。

と主張している。

本研究では、『それから』における「行動不能の状態におちいった教養人」の描写に対し、筆者は疑問を持っている。果たして、漱石は『それから』において近代化の影響を受けて悩んだ人の悩みをどのように描いたのであろうか。

李種恩・柳澤浩哉は、「小説の表現に何らかの特徴を見つけることは必ずしも難しくないが、読みに影響を与えう特徴となると話は別である。」

（「『それから』の表現に現れた代助の思考の特徴—大胆な決断を可能にしたもの—」、2018年）と述べているように、本稿では、『それから』の近代教養人としての主人公代助を中心に、その小説のテキストにおける教養人の苦悩を描いただろうと思われる、苦悩的な表現に着目しながら、『それから』における教養人の苦悩の特徴、という問題点に焦点を当てる。

3・代助の苦悩

代助は小説の主人公の役割を果たした主な登場人物であり、立派な東京帝国大学の卒業者である。

高等遊民と称された有閑教養人として、主人公は自分を現代人だと非常に信じ、自覚している。これは次の引用文から窺えると思われる。

代助は近頃流行語の様に人が使ふ、現代的とか不安とか云ふ言葉を、あまり口にした事がない。「それは、自分が現代的であるのは、云はずと知れてゐると考へたのと、もう一つは、現代的であるがために、必ずしも、不安になる必要がないと、自分丈で信じて居たからである。（『それから』、六の二）

しかし、「近代化」（中略）を避けることはできない」（ヌール・A・エルナツハース『夏目漱石の文学作品における明治の教養人の意識と心理—『それから』と『こころ』を中心に・・・—』カイロ大学文学部日本語日本文学科、2003 年、100 頁）主人公は近代化を時代的な優れた変化として受け入れ、不安等は思わないことにも関わらず、この近代化は主人公の性格、考え方、周りの人々との接触等に大きな苦悩を齎したことが明確だと考えられる。果たして、作品の中に代助の苦悩はどのような場面で、誰と、どのように現れたのであろうか。作品における主人公と他の人物との対応や衝突等を取り上げながら、この問題を追求する。

3・1 性格．考え方に対する苦悩

代助は近代化を受けることによって、自分の性格や考え方の変化にも、その変化のせいで他人との

扱い方の面では問題が起こっていることにも気が付く。これは作品中の何か所で目立ち、以下の作家夏目漱石による指示と主人公自身による言葉や独り言からも分かるのではないか。

そんな好奇心を引き起こすには、実際あまり都会化し過ぎてゐた。（『それから』、二の五）

代助は此頃の自己を解剖するたびに、五六年前の自己と、丸で違つてゐるのに驚ろかずにはゐられない。（同上、四の一）

今の自分から三四年前の自分を回顧して見ると、慥かに、自己の道念を誇張して、得意に使ひ回してゐた。渡金を金に通用させ様とする切ない工面より、真鍮を真鍮で通して、真鍮相当の侮蔑を我慢する方が楽である。と今は考へてゐる。代助が真鍮を以て甘んずる様になつたのは、不意に大きな狂瀾に捲き込まれて、驚ろきの余り、心機一転（後略）（同上、六の五）

代助は人と応対してゐる時、何うしても論理を離れる事の出来ない場合がある。夫が為め、よく人から、相手を遣り込めるのを目的とする様に受取られる。實際を云ふと、彼程人を遣り込める事の嫌な男はないのである。（同上、九の四）

代助は昔の人が、頭脳の不明瞭な所から、実は利己本位の立場に居りながら、自らは固く人の為と信じて、泣いたり、感じたり、激したり、して、其

結果遂に相手を、自分の思ふ通りに動かし得たのを羨ましく思つた。自分の頭が、その位のぼんやりさ加減であつたら、昨夕の会談にも、もう少し感激して、都合のいゝ効果を収める事が出来たかも知れない。彼は人から、ことに自分の父ちゝから、熱誠の足りない男だと云はれてゐた。彼の解剖によると、事實は斯うであつた。人間は熱誠を以て当つて然るべき程に、高尚な、真摯な、純粹な、動機や行為を常住に有するものではない。夫よりも、ずつと下等なものである。其下等な動機や行為を、熱誠に取り扱ふのは、無分別なる幼稚な頭腦の所有者か、然らざれば、熱誠を銜つて、己れを高くする山師に過ぎない。（『それから』、十三の九）

誰の命令も文字通りに拝承した事のない代わりには、誰の意見にも露に抵抗した試みがなかつた。
（中略）今の彼は、不斷の彼とは趣を異にしてゐた。
（同上、十五の五）

このように、代助は自分の前の考え方を近代の影響を受けた考え方と比べれば、前者が可笑しく、後者のままで周りの人々と接すれば困難さを感じてしまうせいで、自分のことを笑ったり輕蔑までしたりするほどの苦悩を抱えているのであろう。それは、「何笑つても構はない。君が僕を笑ふ前に、僕は既に自分を笑つてゐるんだから」（『それから』、六の六）という代助と友達である平岡との会話からも考えられよう。

又、将来や結婚のこと等について家族に聞かれる主人公は自分の反応に対し、不満を感じている。作家夏目漱石はそのような悩んだ気持ちを様々なところに着目し、以下の通り明らかにしていると思われる。

自己を侮辱する気になつても、是ばかりは馬鹿気てゐて、口へ出す勇気がなかつた（『それから』、九の三）

代助は最後に不決断の自己嫌悪に陥つた。（同上、十四の一）

彼は自分で自分の勇氣と胆力に驚ろいた。彼は今日迄、熱烈を厭ふ、危きに近寄り得ぬ、勝負事を好まぬ、用心深い、太平の好紳士と自分を見倣してゐた。徳義上重大な意味の卑怯はまだ犯した事がないけれども、臆病と云ふ自覚はどうしても彼の心から取り去る事が出来なかつた。（『それから』、十五の一）

3・2 家族に対する苦悩

実際に、代助は、書生である門野に、「兎に角家の奴は好くないよ」（『それから』、二の一）と、嫂に、「えゝ、少しは馬鹿にしてゐます」（同上、七の五）と話しているように、代助は近代教養人の立場から家族の考え方を認めなく、そのような気持ちや変わった態度は代助の苦悩の主な原因の一つになると考えられる。

以下においては、特に、父と兄に対する、代助の苦悩を明らかにする。

I 父

代助の父はいつも代助の性格や考え方を批判したり、代助を馬鹿にしたりするせいで、代助はそのような態度に対し、嫌な気持ちを抱いてしまう。具体的に、まず、父からの代助への批判に満ちた言葉、次に、それに対する代助の嫌な気持ちを、父との会話や妹との会話、そして作家漱石の描写を通して明らかにする。

主に、代助の父は代助を次のように批判している。

「三十になつて遊民として、のらくらしてゐるのは、如何にも不体裁だな」（『それから』、三の三）

「御前は、どう云ふものか、誠実と熱心が欠けてゐる様だ。それぢや不可ん。だから何にも出来ないんだ」（同上、三の四）

しかも、作家漱石が指示するように、父の教育方法が代助に悪結果を及ぼし、これは代助の苦悩の一つだったと言えよう。漱石によると、「彼は父と違つて、当初からある計画を拵えて、自然を其計画通りに強ひる古風な人ではなかつた。（中略）父を理攻にする事は困難中の困難であつた。」（『それから』、十三の一）、「代助に至つては、（中略）

現に自分の父から、尤も厳格で、尤も通用しない徳義上の教育を受けた。それがため、一時非常な矛盾の苦痛を、頭の中に起した。代助はそれを恨めしく思つてゐる位であつた。」（『それから』、九の一）

それなのに、そのような問題に全く気が付かない父の反応のせいで、主人公はまして悩まされた気持も抱いてしまうのではないか。

その一方で、代助は父に言われる文句やその叱り方等を気にせず、むしろそれが間違っていると判断していると言ってよい。以下の引用文から分かるように、代助の考えでは、父が生きた時代における胆力知識等は野蛮的な考えに過ぎない。

代助はこれを聞かせられるたびに厭な心持がする。胆力は命の遣り取りの劇しい、親爺の若い頃のような野蛮時代にあつてこそ、生存に必要な資格かも知れないが、文明の今日から云へば、古風な弓術撃剣の類と大差はない道具と、代助は心得てゐる。（『それから』、三の二）

又、父の話に対し、代助は嫂である梅子に次のように文句を言っている。「云はれた事は色々あるんですが、秩序立てて繰り返すのは困るですよ。」（同上、三の六）

その他、主人公は、結婚に対する父の意見や考え方を、「昔し風に甚だ義理堅いもの」（『それから』

ら』、六の七)と批判しており、大事にしない、ということも伺われよう。そればかりではなく、代助は父自身が愚者として見做しているということも、次の漱石が描いた、父の発言や考え方に対する代助の反応を通じて判明になるのではないであろうか。

斯んな事を真面目に口にした、又今でも口にしかねまじき親爺は気の毒なものだと、代助は考へる。(中略)親爺の如きは、神経未熟の野人か、然らずんば己れを偽はる愚者としか代助には受け取れないのである。(『それから』、三の二)

もう鼻から烟を出すのが厭になつた(中略)其時の眼の動かし方で、白眼が一寸ちらついて、相手に妙な心持をさせる(同上、三の三)

父は代助の手際で、何うする事も出来ない男であつた。代助には明らかに、それが分つてゐた。だから代助は未だ曾て父を矛盾の極端迄追ひ詰めた事がなかつた。」(同上、九の一)

尚、父が過去を振り替えて話す時にも、主人公は、納得出来ない。次の引用文はそういうことに注目させるだろう。

父が過去を語る度に、代助は父をえらいと思ふより、不愉快な人間だと思ふ。さうでなければ嘔吐だと思ふ。嘔吐の方がまだ余つ程父らしい気がする。

父許ではない。祖父に就ても、こんな話がある。(中略)代助は斯んな話を聞く度に、勇ましいと云

ふ気持よりも、まづ怖い方が先に立つ。度胸を買つてやる前に、腥ぐさい臭が鼻柱を抜ける様に応へる。（『それから』、四の一）。

以上のように、代助の父の難しい説法や厳しいやり方等が代助にとっては好ましくなく、彼を悩めせるのではないかと言えるのであろう。また、そのせいで、代助は父のことが嫌になっていることも考えられよう。

Ⅱ 兄

実際に、作品中の（『それから』、五の三）の最後の部分では、「兄の様になると、宅にゐても、客に来て同じ心持ちなんだらう。其う世の中に慣れ切つて仕舞つても、楽しみがなくなつて、詰らないものだらう」と思ひながら代助は誠吾の様子を見てゐた」とあるように、近代教養人の目で主人公である代助は後を継ぐ兄が退屈な生活を送る家族の人だと思い、代助はこのような人にはなりたくない、ということが窺える。

さらに、（『それから』、五の四）では「話し相手としては、兄よりも嫂の方が、代助に取つて遥かに興味がある」と書いてあるように、父の後を継ぐ誠吾である兄は代助にとっては、気が利かない家族の人だということを考察することができるのではないであろうか。

それのみならず、兄は弟代助を厳しく批判する時もあり、代助の苦痛の原因にもなると考えられる。以下の引用はそういうことを明らかにすると思われる。

「御前は平生から能く分らない男だつた。夫でも、いつか分る時機が来るだらうと思つて今日迄交際つてゐた。然し今度と云ふ今度は、全く分らない人間だと、おれも諦らめて仕舞つた。世の中に分らない人間程危険なものはない。何を為るんだか、何を考へてゐるんだか安心が出来ない。御前は夫が自分の勝手だから可からうが、御父さんやおれの、社会上の地位を思つて見ろ。御前だつて家族の名誉と云ふ観念は有つてゐるだらう」

兄の言葉は、代助の耳を掠めて外へ零れた。彼はたゞ全身に苦痛を感じた。（『それから』、十七の三）

ところで、代助は父や兄の性格や考え方等を軽蔑したりするばかりではなく、彼らの仕事や彼らが財産を得た方法への不満も抱いた。そういう気持ちを判明させるのは作品中の次の部分だろう。

渡金を金に通用させ様とする切ない工面より、真鍮を真鍮で通して、真鍮相当の侮蔑を我慢する方が楽である。と今は考へてゐる。（中略）全く彼れ自身に特有な思索と観察の力によつて、次第々々に渡金を自分で剥がして来たに過ぎない。代助は此渡金の大半をもつて、親爺が捺摺り付けたものと信じ

てゐる。其時分は親爺が金に見えた。多くの先輩が金に見えた。相当の教育を受けたものは、みな金に見えた。だから自分の渡金が辛かつた。早く金になりたいと焦つて見た。所が、他のものゝ地金へ、自分の眼光がちかに打つかる様になつて以後は、それが急に馬鹿な尽力の様に思はれ出した。（『それから』、六の五）

それ程でなくつても、父と兄の財産が、彼等の脳力と手腕丈で、誰が見ても尤と認める様に、作り上げられたとは肯はなかつた（中略）けれども是は寧ろ天の与へた偶然である。父と兄の如きは、此自己にのみ幸福なる偶然を、人為的に且政略的に、暖室を造つて、拵え上げたんだらうと代助は鑑定してゐた。（同上、八の一）

上述のように、結局、代助は自分の家族に対し、すっきりしてないない気持ちを抱いた上、緊張した関係と結ばれた自分の家族と一緒に暮らすのは役に立たないと感じてしまい、「代助は、最後の權威は自己にあるものと、腹のうちに定めた。父も兄も、嫂も（中略）、決断の地平線上には出て来なかつた。」（『それから』、十四の一）原因にもなると言つていい。

3・3 日本に対する苦悩

「正實と云ふのは、英国の国会議員とか実業家（中略）、日本杯へ来るには勿体ない位な容色だが（後略）」（『それから』、五の三）

この引用文は、代助がやむを得なく、父をはじめ家族等を軽蔑する気持ちが自国までも及んでしまったことを明らかにするであろう。実際に、作品の流れを深く考察すれば、主人公は日本に対する批判、軽蔑、不満足等のせいで悩んでしまったことが分かれると思われる。具体的に次の通り述べよう。

I 建物

作家漱石は、建物の工法の欠点を批判している、街歩きの代助の気持ちを、以下のように描写している。

今日の東京市、ことに場末の東京市には、至る所に此種の家が散点してゐる、のみならず、梅雨に入つた蚤の如く、日毎に、格外の増加律を以て殖えつゝある。代助はかつて、是を敗亡の発展と名づけた。さうして、之を目下の日本を代表する最好の象徴とした。

彼等のあるものは、石油缶の底を継ぎ合はせた四角な鱗で蔽はれてゐる。彼等の一つを借りて、夜中に柱の割れる音で眼を醒まさないものは一人もない。彼等の戸には必ず節穴がある。彼等の襖は必ず狂ひが出ると極つてゐる。（『それから』、六の）

寺と寺の間から、汚ない烟を、雲の多い空に吐いてゐた。代助はそれを見て、貧弱な工業が、生存の為に無理に吐く呼吸を見苦しいものと思つた。

（同上、八の三）

Ⅱ 経済

代助は近代化の影響を受けてしまい、前述の通り、彼は残念な思いをしながら、家族をはじめ日本のビジネスマンの皆は疲労せずに、偶然にお金持ちになってしまったことを極めて批判するばかりであり、たとえどんなに日本の経済的損失が起こっても、彼はそれが当たり前のことだと思ったまま心配さえもしない。これは作品の（八の一）に出た日糖事件の話で暗示されているだろうかと思われる。そればかりではなく、以下の代助の言葉も彼の日本経済への批判の気持ちと関連付けられるとも思われる。

平岡に働けない理由を説明する会話の中から、代助は次のように訴えている。

「（前略）第一、日本程借金を拵らへて、貧乏震ひをしてゐる国はありやしない。（略）日本は西洋から借金でもしなければ、到底立ち行かない国だ。それでゐて、一等国を以て任じてゐる。さうして、無理にも一等国の仲間入をしようとする。だから、あらゆる方面に向つて、奥行を削つて、一等国丈の間口を張つちまつた。なまじい張れるから、なほ悲惨注なものだ。牛と競争をする蛙と同じ事で、（略）。其影響はみんな我々個人の上に反射してゐるから（略）日本国中何所を見渡したつて、輝いてる断面は一寸四方も無いぢやないか。（後略）」（『それから』、六の七）

Ⅲ 教育

近代化における教育の役割を重視している代助は、日本の昔風の教育方法を受容しなくなってしまうのは、以下の引用文から判明になるであろう。

日本の学校でやる、講釈の倫理教育は、無意義のものだと考へた。彼等は学校で昔し風の道德を教授してゐる。それでなければ一般歐洲人に適切な道德を呑み込ましてゐる。此劇烈なる生活慾に襲はれた不幸な國民から見れば、迂遠の空談に過ぎない。此迂遠な教育を受けたものは、他日社会を眼前に見る時、昔の講釈を思ひ出して笑つて仕舞ふ。でなければ馬鹿にされた様な気がする。代助に至つては、（中略）尤も嚴格で、尤も通用しない徳義上の教育を受けた。それがため、一時非常な矛盾の苦痛を、頭の中に起した。代助はそれを恨めしく思つてゐる位であつた。（『それから』、九の一）

Ⅳ 人間関係

実際に、作品の（十の一）に、「其上彼は、現代の日本に特有なる一種の不安に襲はれ出した。其不安は人と人との間に信仰がない原因から起る野蛮程度の現象であつた。彼は此心的現象のために甚しき動揺を感じた。」と示されているように、代助の不満の気持ちは、日本にとどまらず、日本人同士の対人関係にまで至ったことも窺われよう。

以上のように、近代化の受容の影響で、代助の批判や不満の気持ちや批判は、自分の家族の変な考え方や努力しない生き方という小規模な範囲を超え、自国の建物の工法間違いや経済の困難な情勢、教育の悪化、そして人間関係の希薄、つまり日本や日本人という大規模な範囲までも、広がったことが考察される。

3・4 将来に対する代助の苦悩

代助は自分が生まれ育った日本の、受け入れられない状況では、自分の将来のことでも苦悩を感じてしまうのは当たり前なのではないだろうか。

具体的に、作品の（九の三）から覗かれるように、主人公は父に将来のことについて聞かれたとき、彼が答えられなかったのは自分の未来を明瞭に考えたことがないからである。然しながら、これは主人公が何もしたくない訳ではないが、（十三の二）から推察される通り、代助は何かをしなくてはならないと自覚しているが、前述の状況の中で、自分の将来の道を見つけて決めるのが彼の苦痛の一面だと思われる。

以下において主人公が抱いた、将来に関わる苦痛の三面について分析したい。

I お金

（前略）是は、彼の性情が、一図に物に向つて集注し得ないのと、彼の頭が普通以上に鋭どくつて、

しかも其鋭さが、日本現代の社会状況のために、幻像打破の方面に向つて、今日迄多く費やされた（後略）（『それから』、七の六）

上の漱石の分析は、近代教養人である主人公の代助の、お金に対する問題を示すであろう。作品の流れからの事例も、次の通り挙げられる。

代助と友達の妻の三千代とのある会話では、彼は友達である平岡の経済的な困難さについて分かった時に、初めて「自分が金に不自由しない様であて、其实大いに不自由してゐる男」だということに気が付いた。（『それから』、四の五）

そして、以下の作品の（七の五）の代助と仲の良い嫂との会話、そしてそれに対する作家自身の解釈の行間からも、代助のお金の問題とそれに対する悩みが覗かれるのではないか。

「（省略）御金がないと、私見た様なものに頭を下げなけりやなくなるる」

「だから先から頭を下げてゐるんです」

（中略）

「（前略）いくら偉くつも駄目ぢやありませんか。無能力な事は車屋と同なしですもの」

（前略）実は金の工面を思ひ立ってから、自分でも此弱点を冥々の裡に感じてゐたのである（中

略) 大いに働いて、自から金を取らねばならぬといふ決心起し得なかつた。代助は此事件を夫程重くは見えてゐなかつたのである。

このように代助は自分がお金に不自由な男だと自覚していると言えるであろう。また、将来の安否と関わるお金の不自由性のせいで、作品中の(八の三)に、「もし二百円を自分に贈つたものが、梅子でなくつて、父であつたとすれば、代助は、それを経済的中途半端と解釈して、却つて不愉快な感に打たれたかも知れないのである」と書いてあるように、代助は、苦悩を感じると考えられよう。そのことは、代助が教養人なので、「偉」いと思っているだろうと考えられる嫂の言葉も、次のように明らかになるであろう。

たゞ心配になるのは月々上げる御金の事です。貴方の事だから、さう急に自分で御金を取る氣遣はなからうと思ふと、差し当り御困りになるのが眼の前に見える様で、御気の毒で堪りません。(『それから』、十六の六)

Ⅱ 仕事

主人公は、自分の家族に批判されてしまい、のらくらしている人間だとしかみなされていないという事で悩むが、彼は仕事が無い理由は次である。

「代助は決してのらくらして居るとは思はない。たゞ職業の為に汚されない内容の多い時間を有する、上等人種と自分を考へてゐる丈である」(『それから』

ら』、三の三)。又、以前に述べた通り、主人公は何かをしなければならないと自覚しているが、彼が「(前略)然し御父さんの国家社会の為に尽くすには驚いた」(『それから』、三の五)ように、根本的に主人公は日本で働くのが嫌であろう。これは以下の引用文から確認できる。この引用文は、平岡からの「何故働かない」という質問に対する、代助の回答である。

「何故働かないつて、そりや僕が悪いんぢやない。つまり世の中が悪いのだ。もつと、大袈裟に云ふと、日本対西洋の関係が駄目だから働かないのだ。(略)碌な仕事は出来ない。(中略)自分の事と、自分の今日の、只今の事より外に、何も考へてやしない。考へられない程疲労してゐるんだから仕方がない。精神の困憊と、身体の衰弱とは不幸にして伴なつてゐる。(中略)日本の社会が精神的、徳義的、身体的に、大体の上に於て健全なら、僕は依然として有為多望なのさ。さうなれば遣る事はいくらでもあるからね。さうして僕の怠惰性に打ち勝つ丈の刺激も亦いくらでも出来て来るだらうと思ふ。」(『それから』、六の七)

「働らくのも可いが、働らくなら、生活以上の働でなくつちや名誉にならない。あらゆる神聖な労力は、みんな麵麴を離れてゐる」(同上、六の八)」

実際に、以上の主人公の言葉は、正に近代教養人の苦悩を表す本音のようだと言えよう。また、

「彼は第一の手段として、何か職業を求めなければならぬと思つた。けれども彼の頭の中には職業と云ふ文字がある丈で、職業其物は体を具えて現はれて来なかつた。彼は今日迄如何なる職業にも興味を有つてゐなかつた結果として、如何なる職業を想ひ浮べて見ても、只其上を上滑りに滑つて行く丈で、中に踏み込んで内部から考へる事は到底出来なかつた。彼には世間が平たい複雑な色分の如くに見えた。さうして彼自身は何等の色を帯びてゐないとか考へられなかつた。」（『それから』、十六の一）ため、いかにも代助は近代教養人として、進んでいない日本社会では仕事がどうしても出来ていない苦悩を抱かざるを得ないといつても過言ではない。

Ⅲ 結婚

作家漱石の言葉によると、主人公は「生涯一人でゐるか、或は妾を置いて暮すか、或は芸者と関係をつけるか、代助自身にも明瞭な計画は丸でなかつた。」（『それから』、七の六）。果たして、この原因は一体何なんであろうか。作品の流れの通り、代助は、友達平岡の妻になった昔の愛人のことが忘れられない上、近代教養人として日本的な結婚方法についての考えや発想等を断ってしまう。そのせいで家族を説得することも家族に説得されることも出来なく、代助の苦悩の原因になると考えられる。

主人公は「「祖先の掬えらた因念よりも、まだ自分の掬え因念で貰ふ方が貰ひ好い様だな」」（『それから』、三の七）と考えている。このような意見の背景を詳しく窺うべく、次の漱石による、

代助の考えや意見についての描写や解釈を取り上げよう。

（前略）再び結婚に戻つて来た。代助は最近の候補者に就て、此間から親爺に二度程悩まされてゐる。（省略）自分の命の親に当る人の血統を受けたものと縁組をするのは結構な事であるから、貰つて呉れと云ふのである。さうすれば幾分か恩が返せると云ふのである。要するに代助から見ると、何が結構なのか、何が恩返しに当るのか、丸で筋の立たない主張であつた。（省略）だから、結婚を必要事件と、初手から断定して、何時か之を成立させ様と喘る努力を、不自然であり、不合理であり、且つあまりに俗臭を帯びたものと解釈した。（『それから』、七の六）

（前略）彼は同じ論法で、あらゆる意味の結婚が、都会人士には、不幸を持ち来すものと断定した。其原因を云へば、都会は人間の展覧会に過ぎないからであつた。彼は此前提から此結論に達する為に斯う云ふ径路を辿つた。（略）彼は是を自家の経験に徴して争ふべからざる真理と信じた。（中略）代助は、感受性の尤も発達した、又接触点の尤も自由な、都会人士の代表者として、芸妓を撰んだ。彼等のあるものは、生涯に情夫を何人取り替えるか分らないではないか。普通の都会人は、より少なき程度に於いて、みんな芸妓ではないか。（同上、十一の九）

写真は奇体なもので、先づ人間を知つてゐて、その方から、写真の誰彼を極めるのは容易であるが、

その逆の、写真から人間を定める方は中々六づかしい。（同上、十二の四）

進まぬものを貰ふませうと云ふのは今代人として馬鹿氣てゐる。（同上、十三の一）

ところが、主人公にとっては、結婚の問題に関する悩みは結婚自体を超え、むしろ、他の苦悩のさらなる原因にもなってしまうということが、以下の引用文から判明されるのではないか。

たゞ是がため、今日迄の程度より以上に、父と自分の間が隔つて来さうなのを不快注に感じた。

彼は隔離の極端として、父子絶縁の状態を想像して見た。さうして其所に一種の苦痛を認めた。（『それから』、十三の一）

以上のように、代助は、仕事や結婚のことでいろいろ悩んだのみならず、特に結婚に対する悩みのせいで、父との意見対立、というさらなる悩みを感じるようになったしまったことが窺われる。

3・5 代助の苦悩の又苦悩

上述のように、代助は近代化による苦悩を抱えており、その感じは周りの状況のせいで、治るどころか、深刻になってしまうのではないであろうか。作家漱石は、作品の（八の六）において、「（逢ふたんびに、遠くにゐて対応する様な気がする。（中略）誰に逢っても左んな気がする。現代の社会は孤

立した人間の集合体に過ぎなかつた。大地は自然に続いてゐるけれども、其上に家を建てたら、勿切れ／＼になつて仕舞った。家の中にゐる人間も赤切れ切れになつて仕舞った。文明は我等をして孤立せしむるものだと、代助は解釈した」と述べているが、果たして、代助のそのような孤独感の理由は一体なんだろうか。やはり、以下のように、代助の気持ちに対する作家漱石の解釈に注目すれば、主人公を悩ませたろうと思われる孤独感の原因にまでたどり着くことができるのではないだろうか。

（前略）これはたゞ父に信仰がない所から起る代助に取つて不幸な暗示に過ぎなかつた。（省略）代助は平岡に対しても同様の感じを抱いてゐた。

（省略）代助は兄を愛してゐた。けれども其兄に対しても矢張り信仰は有ち得なかつた。嫂は実意のある女であつた。然し嫂は、直接生活の難関に当らない丈、それ丈兄よりも近付き易いのだち考えてゐた。（『それから』、十の一）

又、漱石はそのような気持ちとその理由つまりその因果関係に指摘しながら、次をのように主張していると考えられる。

顧みて自分を見ると、自分は人間中で、尤も相手を齒痒がらせる洋に拵えられてゐた。是も長年生存競争の因果に曝された罰かと思ふと余り有り難い心持はしなかつた。（『それから』、十一の一）

前述の通り、主人公である代助は「自然の児にならうか、又意志の人にならうかと代助は迷った。同時に彼は、彼の生活が、一大断案を受くべき危機に達して居る事を切に自覚した」（『それから』、十の四）のみならず、さらに「彼は彼の頭の中に、彼自身に正当な道を歩んだといふ自信があつた。父も兄も社会も人間も悉く敵であつた」（『それから』、十七の三）ため、代助は近代教養人として、命も鋭く感じれば、自己の生活力の不足も劇しく感じてしまう。その上、代助は、自分を精神的に敗残した人間として見做し、不決断の自己嫌悪に陥ってしまうときもある。要するに、近代化の中では、近代教養人としての代助は苦悩の又苦悩を抱いているということが考察されよう。

4・他の人の苦悩の事例

ストーリーの流れを辿りながら、主人公の以外に、近代では悩んだ人も他にすることが考えられる。それらの人々の苦悩の原因について以下のように分析していきたい。

4・1 平岡の苦悩

作品では、代助以外、苦悩を感じた人たちの代表者としてあげられるのは、主人公の友人である平岡である。平岡常次郎は代助の学生時代の友人であり、関西の銀行に就職したが、失敗し、東京に戻ってくる。作品の（二の四）では、「赴任の当時彼は事務見習のため、地方の経済状況取調のため、大分忙しく働いて見た」と説明されているように、平岡

が卒業するや否や仕事を探す元々の原因は、彼は主人公ほど贅沢な生活に恵まれていなく、仕事をしなければ生計を立てることが全然出来なくなってしまう、ということなのではないか。

実際に貧しい生活をしていることにも関わらず、教養人としての平岡が抱えている主な問題は、勉強の邪魔となっている仕事で失敗しているということなのだろう。具体的に「（省略）地位が夫程高くないので、已を得ず、自分の計画は計画として未来の試験用に頭の中に入れて置いた。尤も始めのうちは色々支店長に建策した事もあるが、支店長は冷然として、何時も取り合はなかつた。六※〔#小書き濁点付き平仮名つ、25-10〕かしい理窟杯を持ち出すと甚だ御機嫌が悪い。（中略）勉強をする暇が自然となくなつて、又勉強が却つて事務の妨をする様に感ぜられて来た」（『それから』、二の四）

それなのに、平岡は自分の仕事で問題が起こってしまうせいで、仕事を退避し、東京に引っ越しする問題とぶつかる。しかも、新しい仕事を見つけても、再び仕事で失敗してしまう。このことは、助けてもらった代助にお礼に行ったときの会話に出た話から分かる。

「僕はことによると、もう実業は已めるかも知れない。実際内幕を知れば知る程厭になる。其上此方へ来て、少し運動をして見て、つくづく勇気がなくなつた」と心底かららしい告白をした。

(中略)

「先達ても一寸話したんだが、新聞へでも這入らうかと思つてゐる」(『それから』、八の五)

ところで、平岡のこの話はいかにも彼が戸惑い、困っていることを示しているに違いなく、何回も兄の会社に紹介してくれるように依頼された代助自身もそう理解しているのではないであらうか。次の引用文もそれを明らかにすると考えられる。

来た時は、運動しても駄目だから遊んでゐると云ふし、今は新聞に口があるから出様と云ふし、少し要領を欠いてゐるが、追窮するのも面倒だと思つて、代助は、

「それも面白からう」と賛成の意を表して置いた。(『それから』、八の五)

要するに平岡の将来は彼自身にとって不明で不安だということが窺える。

果たして、平岡が適当な仕事を見付けることの出来ない理由はなんだろうか。以下の平岡からの代助への言葉が、その疑問に対する答えを含み、平岡の抱いた苦悩そのものを判明させられると思われる。

(前略) 人間は何うしても君の様に独身でなければ仕事は出来ない。僕も一人なら満州へでも亜米

利加へでも行くんだが大いに妻帯の不便を鳴らした。」（『それから』、十一の四）

このように、平岡は自分が既婚者で家族がいるせいで、自分の仕事もうまくいかないと思っていることが分かるのではないかと。ところが、平岡の悩みは仕事に関わるだけではなく、彼の苦悩はお金の面でもあるであろう。実際に平岡は元々の仕事を退避した際、まして新しい悩みが自分の生活に表れてきた。この悩みはお金にかかわるのもである。仕事があればお金がないという当たり前のことは別格として、借金の問題で平岡の生活が苦しくなってしまう、主人公とのある会話では次のように訴えている。

「旨い事をした仮定しても、皆使つて仕舞つてゐる。生活にさへ足りない位。其金は借りたんだよ」

（中略）

「支店長から借りて埋めて置いた」（『それから』、二の四）

実は、「こっちの方を何とかしないと困る」（『それから』、四の五）と自覚している平岡が借金してしまうのは、単なる生計を工夫するためのみならず、「少し御金の工面が出来なくつて？」（同上）と素直に聞く妻の薬代を工夫するためである。

このように、それぞれの問題の原因や内容は違うが、平岡は代助と同様に、教養人として仕事にもお金にも悩まされたことも分かるであろう。

ところが、二人の間に共通苦悩があったと思われ、これは近代教養人としての二人は互いに性格や考え方が変わってしまったという苦悩なのではないか。作品の流れを深く考察すれば、代助も平岡も互いに、近代人としての二人の関係の不安性を感じてしまった、ということも考察される。次の引用文を事例として述べたい。

代助と平岡とは中学時代からの知り合で、殊に学校を卒業して後、一年間といふものは、殆んど兄弟の様に親しく往来した。其時分は互に凡てを打ち明けて、互に力に為り合ふ様なことを云ふのが、互に娯楽の尤もなるものであつた。この娯楽が變じて実行となつた事も少なくないので、彼等は双互の為に口にした凡ての言葉には、娯楽どころか、常に一種の犠牲を含んでゐると確信してゐた。さうして其犠牲を即座に払へば、娯楽の性質が、忽然苦痛に變ずるものであると云ふ陳腐な事実にはさへ気が付かずにゐた。（『それから』、二の二）

平岡が代助を小供視する程度に於て、あるひは其れ以上の程度に於て、代助は平岡を小供視し始めたのである。（同上、二の五）

代助は同時に其う考えた。自分が三四年の間に、是迄變化したんだから、同じ三四年の間に、平岡も、

かれ自身の経験の範囲内で大分変化してゐるだらう。
(同上、六の五)

今日の二人の境界は其時分とは、大分離れて来た。さうして、其離れて、近づく路を見出し悪い事実を、双方共に腹の中で心得てゐる。東京へ着いた翌日、三年振りで邂逅した二人は、其時既に、二人ともに何時か互の傍を立退いてゐたことを発見した。
(同上、六の六)

代助と接近してゐた時分の平岡は、人に泣いて貰ふ事を喜ぶ人であつた。今でも左様かも知れない。が、些ともそんな顔をしないから、解らない。否、力めて、人の同情を斥ける様に振舞つてゐる。孤立しても世は渡つて見せるといふ我慢か、又は是が現代社会に本来の面目だと云ふ悟りか、何方かに帰着する。

平岡に接近してゐた時分の代助は、人の為に泣く事の好きな男であつた。それが次第々々に泣けなくなつた。泣かない方が現代的だからと云ふのではなかつた。事實は寧ろ之を逆にして、泣かないから現代的だと言ひたかつた。泰西の文明の圧迫を受けて、其重荷の下に唸る、劇烈な生存競争場裏に立つ人で、真によく人の為に泣き得るものに、代助は未だ 曾 て 出 逢 は な かつ た 。

代助は今の平岡に対して、隔離の感よりも寧ろ嫌惡の念を催ふした。さうして向ふにも自己同様の念が萌してゐると判じた。昔しの代助も、時々わが胸のうちに、斯う云ふ影を認めて驚ろいた事があつた。

其時は非常に悲しかった。今は其悲しみも殆んど薄く剥がれて仕舞った。だから自分で黒い影を凝と見詰めて見る。さうして、これが真だと思ふ。已を得ないと思ふ。たゞそれ丈になつた。

斯う云ふ意味の孤独の底に陥つて煩悶するには、代助の頭はあまりに判然し過てゐた。彼はこの境遇を以て、現代人の踏むべき必然の運命と考へたからである。従つて、自分と平岡の隔離は、今の自分の眼に訴へて見て、尋常一般の径路を、ある点迄進行した結果に過ないと見做した。（八の六）

以上引用してきた作家漱石の解釈にも関わらず、以下に引用したい、代助と平岡との、いくつかの会話ほど、二人の関係の不安性を証明するものはないであろう。

「僕は失敗したさ。けれども失敗しても働はたらいてゐる。又是からも働はたらく積つもりだ。君は僕の失敗したのを見て笑つてゐる。——笑はないたつて、要するに笑つてると同じ事に帰着するんだから構はない。いゝか、君は笑つてゐる。笑つてゐるが、其君は何も為ないぢやないか。君は世の中を、有の儘で受け取る男だ。言葉を換えて云ふと、意志を發展させる事の出来ない男だらう。意志がないと云ふのは嘘だ。人間だもの。其証拠には、始終物足りないに違ない。僕は僕の意志を現実社会に働き掛けて、其現実社会が、僕の意志の為に、幾分でも、僕の思ひ通りになつたと云ふ確証を握らなくつちや、生きてゐられないね。そこに僕と云ふものゝ存在の

価値を認めるんだ。君はたゞ考へてゐる。考へてる丈だから、頭あたまの中なかの世界と、頭あたまの外そとの世界を別々べつ／＼に建立こんりうして生きてゐる。此大不調和を忍んでゐる所が、既に無形の大失敗ぢやないか。何故なぜと云つて見給へ。僕のは其不調和を外そとへ出だした迄で、君のは内に押し込んで置く丈の話だから、外面ぐわいめんに押し掛けた丈、僕の方が本当の失敗の度どは少すくないかも知れない。でも僕は君に笑はれてゐる。さうして僕は君を笑ふ事が出来ない。いや笑ひたいんだが、世間から見ると、笑つちや不可いけないんだらう」

「何なに笑わらつても構はない。君が僕を笑ふ前に、僕は既に自分を笑つてゐるんだから」

(中略)

「そりや嘘うそだ。おれの細君が、いくら弁護べんごしたつて、嘘うそだ。尤も君は人ひとを笑わらつても、自分を笑つても、両方共頭あたまの中なかで遣やる人だから、嘘うそか本当か其辺はしかと分わからないが……」

「冗談云つちや不可いけない」

「冗談ぢやない。全く本気の沙汰であります。そりや昔むかしの君きみはさうぢや無なかつた。
(後略)」 (『それから』、六の六)

「今日けふは久し振ぶりに好い心持に酔つた。なあ君。——君はあんまり好い心持にならないね。何どうも怪けしからん。僕が昔の平岡常次郎になつてゐるのに、君が昔の長井代助にならないのは怪しからん。是非なり給へ。さうして、大いに遣つて呉れ給へ。僕も是から遣る。から君も遣つて呉れ給へ」
(同上、六の七)

(中略)

「そいつは面白い。大いに面白い。僕見た様に局部に当つて、現実と悪闘してゐるものは、そんな事を考へる余地がない。日本が貧弱だつて、弱虫だつて、働らいてゐるうちは、忘れてゐるからね。世の中が墮落したつて、世の中の墮落に気が付かないで、其中に活動するんだからね。君の様な暇人から見れば日本の貧乏や、僕等の墮落が気になるかも知れないが、それは此社会に用のない傍觀者にして始めて口にすべき事だ。つまり自分の顔を鏡で見る余裕があるから、さうなるんだ。忙がしい時は、自分の顔の事なんか、誰だつて忘れてゐるぢやないか」(同上、六の八)

以上みてきたように、最初は、代助にとっても平岡にとっても、二人の友人関係は、二人の幸せをもたらす娯楽の一面であつたが、近代化の影響を受けた二人の性格や考え方のせいで、その娯楽が苦痛に変わってしまい、近代人としての二人の関係は不安な関係に変わってしまったことが言えるであろう。

4・2 主人公のある知人の苦悩

作品の（二の三）では、主人公代助は友達である平岡と、人生の経験について話すとき、代助は教師として働く教養人の苦悩について次のように語っている。

「僕の知つたものに、丸で音楽の解らないものがある。学校の教師をして、一軒ぢや飯が食へないもんだから、三軒も四軒も懸け持をやつてゐるが、そりや気の毒なもんで、下読をするのと、教場へ出て器械的に口を動かしてゐるより外に全く暇がない。たまの日曜杯は骨休めとか号して一日ぐう／＼寐てゐる。だから何所に音楽会があらうと、どんな名人が外国から来やうと聞に行く機会がない。つまり楽といふ一種の美しい世界には丸で足を踏み込まないで死んで仕舞はなくつちやならない。（後略）」

4・3 寺尾の苦悩

寺尾は主人公の森川の友達であり、近代では仕事のせいで苦悩的な気持ちを持っているのであろう。これを明らかにすべく、日本に対する、寺尾の批判や不満の気持ちが読み取れるだろうと思われる、次の説明文を引用する。

此男は学校を出ると、教師は厭だから文学を職業とすると云ひ出して、他のものゝ留めるにも拘わらず、危険な商賈をやり始めた。やり始めてから三年になるが、未だに名声も上がらず、（省略）けれども外の人に聞くと、寺尾ももう陥落するだらうと

云ふ評判であつた。（中略）寺尾は真面目な顔をして、戦争は何時でもするが、日露戦争後の日本の様に往生しちや詰らんぢやないか。矢っ張り恐露病に罹つてゐる方が、卑怯でも安全だ、と答へて矢っ張り露西亞文学を鼓吹してゐた。（『それから』、八の二）

ところで、代助は友達の寺尾の態度を以下のように分析し、その分析は近代教養人としての寺尾の苦悩を暗示しているのではないであろうか。

（前略）代助はそれを面白く聞いてゐた。然し腹の中では、寺尾の事を誰も賞めないの、其對抗運動として、自分の方では他を貶すんだらうと思つた。（『それから』、八の二）

4・4 但馬の友人の苦悩

作家漱石は、代助の、但馬出身の友人について次のように述べている。

此友人は学校を卒業すると、すぐ国へ歸つたぎり、今日迄ついで東京へ出た事のない男であつた。当人は無論山の中で暮らす気はなかつたんだが、親の命令で已を得ず、故郷に封じ込められてしまつた」（『それから』、十一の九）

このように、主人公の、但馬出身のある友人のは、親の古い考え方のせいで、生活を楽しく過ごせなくて苦悩している、ということが窺えるのではないであろうか。

以上分析してきたように、作品全体においては、近代教養人である主人公代助の苦悩が主に重視されているが、作品の登場人物の中、主人公以外に苦悩を感じた人はいない、というわけではまったくないであろう。代助の周りに、平岡をはじめ、近代化で苦労して苦悩してしまった教養人が何人もいることが言えるのではないか。

5・おわりに

以上のように、本研究において、有名な日本人作家である夏目漱石という作家の名前から、連想される『それから』という有名で傑作な一作品における近代教養人の苦悩の特徴を考察してきた。『それから』の主な人物である主人公代助は、近代化を受容して、その影響で父と兄をはじめ家族や祖先の考え方と違うような考え方や性格を持つようになり、その相違のせいで様々な面でも苦悩を感じてしまうことを判明になった。そのみならず、どうしても「代助にとって、平岡との関係が崩れるのは必然であった」（新谷あゆみ「夏目漱石『それから』研究——代助と周囲の関係変化について——」広島女学院大学日本文学会、2012 年、72 頁）ことは確かであるが、それとは言え、親友の平岡との意見対立や関係崩壊で代助はますます悩んだ、ということも明かした。

また、時間に連れて、「友だちや家族との関係が変化」（新谷前掲書、73 頁）し、彼の苦悩は、個人的で小さな範囲としての自分自身と自分の家族の

範囲を超え、経済や、建物、教育、人間関係といった、社会的で大きな範囲としての日本や日本人の範囲関連事項にまで及んでしまったことも明らかにした。さらに、この考察により、「友だちや家族との関係が変化」してしまった代助が、将来の安定性と密接に関わっている、お金・仕事・結婚などに対しても、代助がより深刻な苦悩的な気持ちを持っているのは当然だということが分かるであろう。

そのほかにも、平岡はもちろん、寺尾などの主人公の知人や友人、それぞれが悩んだ問題の分析にも接せば、作家夏目漱石は、主人公代助の苦悩のみならず、他の登場人物の苦悩の描写を通して、『それから』における近代教養人の苦悩を描くように努めたということは、全然考察にならないこともあるまい。

結びにかえて “『それから』の「それ」は何を指すのであろうか、

以上夏目漱石の『それから』において、主にどれだけ主人公の苦悩性が考慮され、同作品全体における教養人の苦悩とその特徴という問題意識に触れてみた。最後に、いま一つ、余計な注釈を付け加えねばならない。

筆者は、近代化のお陰で国家や教育等がさらに発展するのを期待して誇りに思うどころか、近代化の影響でそれらを軽蔑したり、受け入れられなくなったりすることは、近代化の本当の意味の取り間違え

から発生する問題だということを、思わせずにはおかない。

「自分の古さを油断すれば、自分の新しさを失ってしまう」というエジプトの諺のように、発展が実現する為に古代や祖先等を軽蔑すれば、何も実現できない。寧ろ、古代が近代や現代の元や根本だと確信したまま、新しい時代の維新等に基づき、古代等を発展させる必要がある。何故なら、古代の人々の指導や指摘等がなかったら、近現代人は自分の時代や生活等を発展させることは出来なかったのは絶対的な結果だと思われるからである。

『それから』に即して言えば、作品で極めて悩んだ主人公の苦悩の重大な原因は、主人公が自分なりの道を選ぼうとした際、祖先や古代の道と必ず違った道を目指したことと考えられる。但し、主人公がいくらやってみても、成し遂げたい目的まで達せないことに気付き、前もって思い込んでいた先入観を変えるように、殊に作品の後半と終わりのところに、次の通り思い切って発言するようになるということが思われよう。

「父に満足を与える為の結婚を承諾するに外にならなかった」（『それから』、十五の五）

「門野さん。僕は一寸職業を探して来る」（同上、十七の三）

結論的に言ってしまうと、筆者は、作品の最後に表れた、主人公の性格の変化こそが『それから』

という作品の題名自体とも重なってくると言えよう。即ち、『それから』は、別の読み方で読めば主人公の反省物語だといことであろう。読者は作品の終結部分を余程注意深く読み進んでいかないと、発見することは出来ないかもしれないが、ここで『それから』の「それ」を具体的に取り上げなければならない。果たしてここで取り分け「それ」という指示語は何を指すのであろうか。おそらく「電車に乗って行かうと決心した」（『それから』、十七の三）代助の、下車後、換言すれば、「それ」からの人生の新しい旅もしくは「それから」の人生の変化などといった、およその見当が付こうというものであろう。要するに、“それから、”というのは、苦悩を長く抱いた主人公はその性格や考え方等を変えてからの自分自身の人生そのものが、「“それから、”どうなるだろうか」という疑問自体を暗示している、ということなのではないであろうか。それは平凡な結論かもしれないが、筆者にとって収穫で、以上のように先ず一応理解出来たことに満足して各櫃する。

『それから』における苦悩を判明した言葉の引用索引

争ふべからざる 16

苦痛 10、13、17、20

困る 8、19

困難中の困難 8

困憊 15

自己嫌悪 7

敵 17

動揺を感じた 12

悲惨 12

疲労 15

不安 5、12

不幸 12、15、16、17

迷った 17

見苦しい 11

出典

原作 夏目漱石 「それから」、(森本政彦発行漱石全集 第六巻』岩波書店、一九九四年五月九日)、
https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/1746_18325.html

参考文献

石原千秋『反転する漱石』、筑摩書房、1998 年

新谷あゆみ「夏目漱石『それから』研究 —— 代助と周囲の関係変化について——」(『広島女学院大学国語国文学誌』、第 42 号、広島女学院大学日本文学会、2012 年 12 月)

李種恩・柳澤浩哉「『それから』の表現に現れた代助の思考の特徴 —大胆な決断を可能にしたもの—」、https://hyogen-gakkai-official.org/pdf/101/101_11-20.pdf、2018 年 8 月)

深江浩「『それから』論」(『同志社国文学』、第 7 号、同志社大学国文学会、1972 年 2 月)

ヌール・A・エルナッハース『夏目漱石の文学作品における明治の教養人の意識と心理—『それから』と『こころ』を中心に・・・—』(カイロ大学文学部日本語日本文学科、2003 年 6 月 17 日)